

《自然のタネ蒔き : その 2 . 動物散布(付着型)》

フックや粘液で動物の毛皮などに引っ付いて運ばれるタネたちもいます。

①フックやトゲで引っ付いて・・・



左のオナモミ(キク科)のように、フックで動物の毛皮などに引っ付いて運ばれるタネもあります。皆さんも友達の服にくっ付けて遊んだことがあるのではありませんか? 手芸などで使うマジックテープはこのオナモミをヒントに発明されたのだそうですよ。自然にあるものを真似ることで生み出された発明品もいろいろあるようですね。



同じような運ばれ方をするものにキンミズヒキ(下左:バラ科)やフジカンゾウ(下中:マメ科)、ヤナギイノコズチ(下右:ヒユ科)などがあります。

先日、子どもとサッカーの練習をしていたら、角の草むらに転がったボールをとりに行った子どもが「痛

い、痛い!」と大騒ぎして出てきました。アメリカセンダングサというキク科の引っ付き虫がジャージにびっしりと引っ付いていたのでした。

②粘液で引っ付いて・・・



写真のチヂミザサ(イネ科)のように、粘液を出して動物に引っ付いて運ばれるものもあります。左は花で、稲やススキなどと同じイネ科の仲間だということが分かりますね。右のように果実が成熟すると、ネバネバした液を出してそこを通る動物に引っ付くのです。以前、校庭の植物で紹介したオオバコもこのタイプですが、その仕組みが実におもしろく、

カプセルのような果実が踏まれて割れると中の種子がのぞきますが、種子の表面は紙おむつの中身のような物質でできていて、雨にぬれるとふくらんでゼリー状になります。そしてそこを通る人のクツや車のタイヤなどに引っ付いて運ばれるのです。オオバコが人の通る道沿いに生えているのが分かる気がしますね。

[理科支援員 宮内]